

# 高齢者における装いへの関心と QOL の関連

安永明智<sup>\*.\*\*\*\*</sup> 谷口幸一<sup>\*\*.\*\*\*\*</sup> 野口京子<sup>\*\*\*.\*\*\*\*</sup>

## Interest in Dressing Behavior and Quality of Life in Older People

Akitomo Yasunaga, Koichi Yaguchi and Kyoko Noguchi

**要 旨** 本研究は、全国の70歳以上の高齢者を対象に、郵送法による質問紙調査法を用いて、服装や流行への関心と外出着の着装基準、外出の頻度、ボランティアや町内会活動への参加、QOLとの関係を横断的に検討することを目的とした。2010年1月に全国の70歳以上の高齢者850名に調査票を郵送し、568名（男性274名；平均年齢76.0±4.4歳、女性294名；平均年齢75.8±4.7歳）から回答が得られた（有効回答率66.8%）。調査は、自分や他人の服装への関心、流行への関心、外出着の着装基準、外出の頻度、ボランティアや町内会活動への参加、生きがい、抑うつ、活動能力について質問した。分析の結果から、（1）高齢女性は、高齢男性と比較して、自分及び他人の服装への関心や流行への関心が高く、外出着の着装基準においても、個人的服装嗜好、流行、機能性、社会的服装規範を重視すること、（2）服装や流行への関心が高い高齢者は、低い高齢者と比較して、外出着の着装基準において、個人的服装嗜好や流行、機能性、社会的規範を重視すること、（3）服装や流行への関心が高い高齢者は、低い高齢者と比較して、町内活動やボランティア活動に積極的に参加していること、そして活動能力や生きがい感も高く、メンタルヘルスも良いこと、などが明らかにされた。本研究の結果は、高齢期において、装いに関心を持つことが、生活の質（Quality of Life：QOL）の維持・増進に貢献しうる可能性があることを示唆する。

キーワード 高齢期 服装 生活の質（Quality of Life：QOL）

## 緒 言

平成21年10月1日現在、わが国の65歳以上人口は、2900万5千人と総人口の22.7%を占めている。このような超高齢社会を迎えたわが国において、健康寿命の延伸や生活の質（Quality of Life；以下QOLと略す）の向上を目指していくことは重要な課題となっている。2006年4月に導入された介護予防制度においても、心身機能の改善や生活機能向上を図り、自己実現や生きがいづくりを促進していくことの重要性が示されている。

このような社会的背景を受け、内外の研究において、高齢期のQOLの概念やその維持・増進に寄与する要因についての研究が数多く実施されている（古谷野，1992；柴田，1996；U.S. Department of Health and Human Services，2000）。そして先行研究では、日常生活で服装や化粧

\* 本学准教授 健康心理学 \*\* 東海大学健康科学部社会福祉学科 教授 老年心理学 \*\*\* 本学教授 健康心理学  
\*\*\*\* 文化女子大学 文化ファッション研究機構

などの装いに積極的な関心や態度を持つことが、高齢者の QOL の維持・増進に有効であることが報告されている（箱井・上野・小林，2001，2002；箱井・上野・泉・福岡・田中，2001；上野・箱井・小林，2002；山岸，2000）。例えば，高齢者施設で高齢者の着装行動と感情変化を検討した研究（箱井ら，2001）では，服を着るという行為は，着装者の感情を肯定的な方向へ活性化させることや，積極的に行動する意欲を高めることなどが明らかにされている。同様に，小林（2000）は，老人ホームにおける調査結果から，入居者におしゃれをさせることは，入居高齢者が明るくなる，若々しくなるなどの情動を活性化させることに効果があることを報告している。このように，過去の研究の知見から，日常生活での装いを豊かにすることが，高齢者の QOL の向上に寄与する可能性が示されている。しかし，先行研究の大部分は，少数の事例を対象とした実証的研究であることや，調査研究に関しても，ある特定の高齢者集団（例えば，老人福祉施設などの入所者や老人クラブのメンバーなど）を対象としているためサンプリングに問題があるなどの課題が残る。加えて，日本はもとより欧米の研究においても，高齢者の装いへの関心や行動と心身の健康の関連に関する基礎的な調査データの蓄積はほとんどない。

そこで本研究では，全国の高齢者を対象に，郵送法による質問紙調査法を用いて，服装や流行への関心と外出着の着装基準，外出の頻度，ボランティアや町内会活動への参加，QOL との関連を横断的に検討することを目的とした。高齢者の QOL の構成概念は，多岐にわたっているが，本研究では，高齢者の QOL を生きがい感や抑うつで評価されるメンタルヘルス，活動能力と操作的に定義した。

## 方 法

### 1. 調査対象と手続き

2010 年 1 月に全国の 70 歳以上の高齢者を対象に，装い行動と QOL に関する質問紙調査を実施した。調査は，NTT レゾナント株式会社 goo リサーチに依頼し，全国に登録されている調査モニターより，70 歳以上の高齢者 850 名に調査票を郵送した。有効回答数は，568 名（男性 274 名；平均年齢  $76.0 \pm 4.4$  歳，女性 294 名；平均年齢  $75.8 \pm 4.7$  歳）であった（有効回答率 66.8%）。

### 2. 調査内容

#### （1）服装への関心と外出着の着装基準

服装への関心は，自分の服装，他人の服装，流行への関心の程度について，「非常に関心がある」，「ある程度は関心がある」，「あまり関心がない」，「全く関心がない」の 4 件法で回答を求めた。分析に際しては，全てにおいて，「非常に関心がある」と「全く関心がない」と答えた者が少数であったため，「非常に関心がある・ある程度は関心がある」と「あまり関心がない・全く関心がない」の 2 つのカテゴリーに再分類した。外出着の着装基準は，高齢者版着装基準尺度（田中・秋山・泉・上野・西川・吉川，1998）を用いて評価した。本尺度は，「個人的服装嗜好」，「流行」，「機能性」，「社会的服装規範」の 4 つの下位因子から構成されており，得点が高いほど着装行動において，その基準を重視することを意味する。

## (2) 活動状況及び活動能力

活動状況は、外出の頻度（ほとんど毎日、週に4・5日、週に2・3日、週に1日程度、全くなし）とボランティア活動や町内会活動への参加（参加している、参加していない）で測定した。また活動能力は、老研式活動能力指標（古谷野・柴田・中里・芳賀・須山, 1987）で評価した。老研式活動能力指標は、「手段の自立因子」（5項目）、「知的能動性因子」（4項目）、「社会的自立因子」（4項目）の3因子13項目から構成されており、「はい」（1点）、「いいえ」（0点）の2件法で回答を求める。合計得点が高いほど活動能力が高いことを示す。

## (3) 生きがいと抑うつ

生きがいは、高齢者向け生きがい感スケール（K-1式）（近藤・鎌田, 2003）を用いて評価した。本尺度は、16項目で構成されており、「自己実現と意欲」「存在感」「生活充実感」「生きる意欲」などで表せる生きがい感を測定することができる。「はい」（2点）、「どちらでもない」（1点）、「いいえ」（0点）の3件法で評価し、16項目の合計を生きがい得点とした。点数が高いほど、生きがい感が高いことを意味する。抑うつの評価に関しては、老人用うつスケール短縮版（Geriatric Depression Scale:GDS 短縮版）（矢富, 1994）を用いた。本尺度は、15項目で構成されており、「はい」、「いいえ」の2件法で評価する。否定的な回答に得点1を与え、15項目の合計をGDS得点とした。点数が高いほど、抑うつが高いことを示す。

## 3. 分析方法

各変数のデータについては、連続変数は平均値±標準偏差（回答数）、離散変数は回答数（割合：%）で示した。服装への関心の程度と連続変数の関係は、満年齢を調整した共分散分析を用いて、服装への関心と離散変数の関係は、フィッシャーの正確確率検定及び $\chi^2$ 検定で分析した。欠損値は、分析毎に除外した。全ての分析は、Statistical Package for Social Science 16.0（SPSS Inc., Chicago, IL）を用いて実施し、5%未満を有意水準として採用した。

## 結 果

### 1. 対象者の特徴

対象者の特徴は、表1に示す通りである。自分の服装への関心、他人の服装への関心、流行への関心、外出着の選択基準の個人的服装嗜好得点、流行得点、機能性得点、社会的服装規範得点、老研式活動能力指標の社会的自立因子得点に統計学的に有意な性差が示された。自分及び他人の服装や流行への関心については、女性が男性と比較して、「非常に関心がある」、「関心がある」と答えた者の割合が多く、「あまり関心がない」、「まったく関心がない」と答えた者の割合が少なかった。同様に、外出着の選択基準の個人的服装嗜好、流行、機能性、社会的服装規範、老研式活動能力指標の社会的自立因子の全てで、女性が男性よりも高い得点を示した。

### 2. 自分の服装への関心と各変数の関係

自分の服装への関心と各変数の関係を表2に示した。男女とも、自分の服装に「関心がある・

表 1. 対象者の特徴

	男性	女性	
年齢 1) a)	76.0±4.4 (274)	75.8±4.7 (294)	
自分の服装への関心 2), b)			
非常に関心がある	13 (4.7)	46 (15.7)	
ある程度は関心がある	154 (56.2)	191 (65.2)	**
あまり関心がない	90 (32.8)	51 (17.4)	
まったく関心がない	17 (6.2)	5 (1.7)	
他人の服装への関心 2), b)			
非常に関心がある	7 (2.6)	23 (7.8)	
ある程度は関心がある	104 (38.0)	186 (63.5)	**
あまり関心がない	137 (50.0)	74 (25.3)	
まったく関心がない	26 (9.5)	10 (3.4)	
流行への関心 2), b)			
非常に関心がある	5 (1.8)	17 (5.8)	
ある程度は関心がある	90 (32.8)	162 (55.3)	**
あまり関心がない	147 (53.6)	95 (32.4)	
まったく関心がない	32 (11.7)	19 (6.5)	
服装(外出着)選択の基準 1), a)			
個人的服装嗜好得点	22.9±4.5 (272)	24.4±4.3 (286)	**
流行得点	10.0±3.2 (272)	11.1±2.8 (291)	**
機能性得点	13.5±2.8 (272)	14.8±2.7 (287)	**
社会的服装規範得点	11.5±2.6 (272)	12.1±2.4 (289)	**
外出の頻度 2), b)			
ほとんど毎日	57 (21.1)	49 (16.8)	
週に4,5日	49 (18.1)	58 (19.9)	
週に2,3日	71 (26.3)	93 (31.8)	n.s.
週に1日程度	54 (20.0)	58 (19.9)	
全くなし	39 (14.4)	34 (11.6)	
ボランティアや町内会活動への参加 2), c)			
参加している	94 (34.7)	79 (27.1)	n.s.
参加していない	177 (65.3)	212 (72.9)	
老研式活動能力指標 1), a)			
手段的自立得点	4.4±1.4 (273)	4.5±1.3 (289)	n.s.
知的能動性得点	3.5±0.9 (272)	3.5±0.9 (293)	n.s.
社会的自立得点	2.9±1.3 (273)	3.1±1.2 (291)	*
合計得点	10.7±3.0 (271)	11.0±2.8 (287)	n.s.
GDS得点 1), a)	3.9±3.6 (266)	4.3±3.6 (271)	n.s.
生きがい得点 1), a)	40.6±6.8 (267)	41.0±6.7 (274)	n.s.

1); 平均値±標準偏差(標本数), 2); 回答数(%)

a); 対応のないt検定, b);  $\chi^2$ 検定, c); フィッシャーの正確確率検定

\*;&lt;.05, \*\*;&lt;.01, n.s.; not significant.

表2. 自分の服装への関心と各変数の関係

	男性			女性		
	非常に関心がある・ ある程度は関心がある	あまり関心がない・ 全く関心がない		非常に関心がある・ ある程度は関心がある	あまり関心がない・ 全く関心がない	
外出時の着装の基準 1), a)						
個人の服装嗜好得点	24.5±4.0 (166)	20.3±3.9 (106)	**	25.3±3.9 (232)	20.5±3.8 (54)	**
流行得点	11.5±2.8 (166)	7.8±2.2 (106)	**	11.7±2.5 (235)	8.3±2.2 (56)	**
機能性得点	13.7±2.6 (166)	13.2±3.1 (106)	n.s.	14.9±2.7 (231)	14.1±2.5 (56)	*
社会的服装規範得点	12.2±2.4 (167)	10.3±2.4 (106)	**	12.4±2.3 (233)	10.8±2.6 (56)	**
外出の頻度 2), c)						
ほとんど毎日	43 (26.2)	14 (13.2)		41 (17.4)	8 (14.3)	
週に4,5日	31 (18.9)	18 (17.0)		45 (19.1)	13 (23.2)	
週に2,3日	38 (23.2)	33 (31.1)	n.s.	74 (31.5)	18 (32.1)	n.s.
週に1日程度	30 (18.3)	24 (22.6)		48 (20.4)	10 (17.9)	
全くなし	22 (13.4)	17 (16.0)		27 (11.5)	7 (12.5)	
ボランティアや町内会活動への参加 2), b)						
参加している	68 (41.2)	26 (24.5)	**	71 (69.7)	8 (14.3)	*
参加していない	92 (58.8)	80 (75.5)		163 (30.3)	48 (85.7)	
老研式活動能力指標 1), a)						
手段的自立得点	4.7±0.9 (166)	3.9±1.8 (107)	**	4.7±1.0 (233)	3.8±2.0 (55)	**
知的能動性得点	3.7±0.6 (166)	3.1±1.1 (106)	**	3.6±0.7 (236)	3.0±1.3 (56)	**
社会的自立得点	3.2±1.0 (166)	2.4±1.4 (107)	**	3.3±0.9 (234)	2.2±1.5 (56)	**
合計得点	11.6±2.0 (166)	9.3±3.7 (106)	**	11.6±2.1 (231)	8.9±4.0 (56)	**
GDS得点 1), a)	3.2±3.5 (162)	4.9±3.6 (104)	**	3.7±3.2 (214)	6.5±4.1 (56)	**
生きがい得点 1), a)	42.1±6.0 (163)	38.2±7.2 (104)	**	42.3±5.5 (219)	35.7±8.2 (54)	**

1): 平均値±標準偏差(回答数), 2): 回答数(%)

a): 年齢を調整した共分散分析, b): フィッシャーの正確確率検定, c):  $\chi^2$ 検定

\*: <0.05, \*\*: <0.01, n.s.: not significant.

ある程度は関心がある」と答えた者が、「あまり関心がない・全く関心がない」と答えた者と比較して、高齢者版着装基準尺度の全ての下位因子得点（男性の機能性得点を除く）、老研式活動能力指標の合計得点と全ての下位因子得点、生きがい得点が、統計学的に有意に高かった。また、ボランティアや町内会活動への参加の割合も高かった。GDSに関しては、「あまり関心がない・全く関心がない」と答えた者が、「関心がある・ある程度は関心がある」と答えた者よりも高い得点を示し、抑うつ傾向が強いことが示された。

### 3. 他人の服装への関心と各変数の関係

他人の服装への関心と各変数の関係を表3に示した。男女とも、他人の服装に「関心がある・ある程度は関心がある」と答えた者が、「あまり関心がない・全く関心がない」と答えた者と比較して、高齢者版着装基準尺度の全ての下位因子得点（女性の機能性得点を除く）、老研式活動

表3. 他人の服装への関心と各変数の関係

	男性			女性		
	非常に関心がある・ ある程度は関心がある	あまり関心がない・ 全く関心がない		非常に関心がある・ ある程度は関心がある	あまり関心がない・ 全く関心がない	
外出時の着装の基準 1), a)						
個人的服装嗜好得点	25.2±4.3 (111)	21.2±3.8 (161)	**	25.4±4.1 (205)	22.0±4.0 (81)	**
流行得点	12.0±3.0 (110)	8.7±2.5 (162)	**	11.9±2.6 (207)	9.1±2.3 (84)	**
機能性得点	14.2±2.5 (110)	13.0±2.9 (162)	**	14.8±2.6 (203)	14.6±2.9 (84)	n.s.
社会的服装規範得点	12.9±2.4 (111)	10.5±2.2 (162)	**	12.5±2.2 (205)	11.0±2.5 (84)	**
外出の頻度 2), c)						
ほとんど毎日	32 (29.4)	25 (15.5)		34 (16.3)	15 (18.1)	
週に4,5日	17 (15.6)	32 (19.9)		39 (18.8)	19 (22.9)	
週に2,3日	26 (23.9)	45 (28.0)	n.s.	70 (33.7)	22 (26.5)	n.s.
週に1日程度	22 (20.2)	32 (19.9)		44 (21.2)	14 (16.9)	
全くなし	12 (11.0)	27 (16.8)		21 (10.1)	13 (15.7)	
ボランティアや町内会活動への参加 2), b)						
参加している	52 (47.3)	42 (26.1)	**	66 (32.0)	13 (15.5)	**
参加していない	58 (52.7)	119 (73.9)		140 (68.0)	71 (84.5)	
老研式活動能力指標 1), a)						
手段的自立得点	4.8±0.8 (110)	4.2±1.6 (163)	**	4.7±0.9 (205)	4.0±1.9 (83)	**
知的能動性得点	3.8±0.6 (110)	3.3±1.0 (162)	**	3.6±0.7 (208)	3.1±1.2 (84)	**
社会的自立得点	3.3±0.9 (110)	2.6±1.4 (163)	**	3.3±0.9 (207)	2.6±1.5 (83)	**
合計得点	11.9±1.8 (110)	10.0±3.4 (162)	**	11.6±1.9 (204)	9.6±3.9 (82)	**
GDS得点 1), a)	3.2±3.4 (106)	4.3±3.7 (160)	*	3.7±3.1 (191)	5.7±4.3 (79)	**
生きがい得点 1), a)	43.1±5.1 (109)	38.8±7.2 (158)	**	42.4±5.4 (191)	37.7±8.1 (82)	**

1); 平均値±標準偏差(回答数), 2); 回答数(%)

a); 年齢を調整した共分散分析, b); フィッシャーの正確確率検定, c);  $\chi^2$ 検定

\*;<0.05, \*\*;<0.01, n.s.;not significant

能力指標の合計得点と全ての下位因子得点, 生きがい得点が, 統計学的に有意に高かった。また, ボランティアや町内会活動への参加の割合も高かった。GDSに関しては, 「あまり関心がない・全く関心がない」と答えた高齢者が, 「関心がある・ある程度は関心がある」と答えた者よりも高い得点を示し, 抑うつ傾向が強いことが示された。

#### 4. 流行への関心と各変数の関係

流行への関心と各変数の関係を表4に示した。男女とも, 流行に「非常に関心がある・ある程度は関心がある」と答えた者が, 「あまり関心がない・全く関心がない」と答えた者と比較して, 高齢者版着装基準尺度の全ての下位因子得点(女性の機能性得点を除く), 老研式活動能力指標の合計得点と全ての下位因子得点(女性的手段的自立因子得点を除く), 生きがい得点が, 統計学的に有意に高かった。また, ボランティアや町内会活動への参加の割合も高かった。GDS得

表4. 流行への関心と各変数の関係

	男性			女性		
	非常に関心がある・ ある程度は関心がある	あまり関心がない・ 全く関心がない		非常に関心がある・ ある程度は関心がある	あまり関心がない・ 全く関心がない	
外出時の着装の基準 1), a)						
個人的服装嗜好得点	25.0±4.7 (95)	21.7±3.9 (177)	**	25.6±4.1 (175)	22.6±3.9 (111)	**
流行得点	12.5±2.9 (94)	8.7±2.5 (178)	**	12.2±2.5 (177)	9.3±2.2 (114)	**
機能性得点	14.2±2.6 (95)	13.1±2.8 (177)	**	14.9±2.5 (174)	14.6±2.9 (113)	n.s.
社会的服装規範得点	12.7±2.6 (95)	10.8±2.3 (178)	**	12.6±2.3 (176)	11.2±2.3 (113)	**
外出の頻度 2), c)						
ほとんど毎日	29 (31.2)	28 (15.8)		30 (16.9)	19 (16.8)	
週に4,5日	13 (14.0)	36 (20.3)		30 (16.9)	28 (24.8)	
週に2,3日	24 (25.8)	47 (26.6)	*	61 (34.3)	31 (27.4)	n.s.
週に1日程度	15 (16.1)	39 (22.0)		38 (21.3)	20 (17.7)	
全くなし	12 (12.9)	27 (15.3)		19 (10.7)	15 (13.3)	
ボランティアや町内会活動への参加 2), b)						
参加している	49 (52.1)	45 (25.4)	**	60 (34.1)	19 (16.7)	**
参加していない	45 (47.9)	132 (74.6)		116 (65.9)	95 (83.3)	
老研式活動能力指標 1), a)						
手段的自立得点	4.8±0.7 (94)	4.2±1.6 (179)	**	4.8±0.8 (175)	4.1±1.8 (113)	**
知的能動性得点	3.8±0.5 (93)	3.3±1.0 (179)	**	3.7±0.7 (178)	3.2±1.1 (114)	**
社会的自立得点	3.4±0.9 (94)	2.6±1.3 (179)	**	3.4±0.9 (177)	2.6±1.3 (113)	**
合計得点	12.1±1.7 (93)	10.0±3.3 (179)	**	11.8±1.7 (174)	9.8±3.6 (112)	**
GDS得点 1), a)	2.7±2.8 (90)	4.5±3.8 (176)	**	3.3±2.9 (164)	5.7±4.1 (106)	**
生きがい得点 1), a)	43.3±4.8 (93)	39.1±7.2 (174)	**	42.7±5.4 (163)	38.5±7.6 (110)	**

1): 平均値±標準偏差(回答数), 2): 回答数(%)

a): 年齢を調整した共分散分析, b): フィッシャーの正確確率検定, c):  $\chi^2$ 検定

\*: <0.05, \*\*: <0.01, n.s.: not significant.

点に関しては、「あまり関心がない・全く関心がない」と答えた者が、「関心がある・ある程度は関心がある」と答えた者よりも高い得点を示し、抑うつ傾向が強いことが示された。加えて、男性では、他人の服装への関心の程度が高い者ほど外出の頻度が多かった。

## 考 察

本研究は、70歳から95歳までの高齢者586名を対象に、服装や流行への関心の程度と外出着の着装基準、外出の頻度、ボランティアや町内会活動への参加、QOLとの関係を質問紙調査法によって横断的に検討した。

先行研究では、女性は男性と比較して、服装への関心が高いことが報告されている(箱井ら, 2000; 岡田, 2000; 劉・全, 2005)。例えば、高齢者の衣生活行動を検討した岡田(2000)の研究では、被服購入や選択行動への関わり方は、女性は積極的であるのに対して、男性は無関心で

他人まかせで消極的であることが報告されている。同様に、箱井ら（2000）の研究においても、服を買いに出かけ、流行を先取りするなどの流行への関心は、高齢男性よりも高齢女性の方が高いことが明らかにされている。本研究の結果も先行研究の知見を支持し、女性は、男性と比較して、服装や流行への関心が高く、外出着の着装基準においても、個人的服装嗜好、流行、機能性、社会的服装規範の全てを重視していた。

次に、服装や流行への関心と着装基準の関係については、男女とも、自分や他人の服装や流行に関心が高い者は、低い者よりも、外出着の着装基準において、個人的服装嗜好や流行、社会的服装規範を重視していた。また、全てで統計的に有意な差は認められなかったが、機能性に関しても重視する傾向にあった。西藤・中川（2004）は、中高年女性の服装に対するおしゃれ意識と規範意識を調査した結果から、中高齢女性の服装観は、機能性ととも自分らしさを表現することを重視していること、またおしゃれ意識が高い人でも、規範に応じた服装を心がけるなど、服装規範から逸脱しない範囲で、おしゃれに積極的であることを報告している。本研究の結果からも、服装や流行への関心が高い高齢者は、外出着の着装基準において、個人的服装の嗜好性や流行、機能性を重視すると同時に、社会的規範についても高い意識を持っていることが示唆された。またその傾向は男女同様であった。

最後に、服装や流行への関心と高齢者の行動、QOL との関連を考察する。過去の実践的研究から得られた知見からは、高齢者にとって装うことが、日常生活の活性化を導き、情動などの心理的側面に対しても良い影響を与えることが確認されている。例えば、山岸（2000）は、特別養護老人ホーム入居者2名に対して、ファッションコーディネートにより装いの工夫の働きかけを実施して日常の様子を経過観察した結果、対象者が、心身の不調を訴えることも少なくなり、精神面も活性化していることや、おしゃれをすることで、自己の感情表出が豊かになり、職員に対して自分から進んでコミュニケーションをとるようになったことなどを報告している。同様に、京都市の老人福祉施設において、高齢者のファッションショーを実施した実証的な研究（上野ら、2002）では、ファッションショーが、高齢者の情動の活性化に刺激となり得ることや、日常生活の目標や生きがいにつながるということが明らかにされている。本研究の調査結果からも、自分や他人の服装や流行に対して関心の高い高齢男女は、低い者と比較して、積極的に町内会活動やボランティア活動に参加していること、活動能力が高いこと、メンタルヘルスが良く、生きがい感が高いことが示された。厚生労働省が2000年より実施している21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）の中でも、健康寿命の延伸を図っていく上で、社会活動に積極的に参加することや生きがいを持つこと、心の健康を良い状態で保つことの重要性が唱えられている（財団法人健康・体力づくり事業財団、2000）。本調査研究の結果や実証的な先行研究の知見を踏まえ、高齢期のQOLの維持・増進に対して、装いに関心を持つことが、情動や行動の活性化を通して、貢献する可能性を示唆する。

## 結 論

本研究の結果から、（1）高齢女性は、高齢男性と比較して、自分及び他人の服装への関心や



流行への関心が高く、外出着の着装基準においても、個人的服装嗜好、流行、機能性、社会的服装規範を重視すること、(2) 服装や流行への関心が高い高齢者は、低い高齢者と比較して、外出着の着装基準において、個人的服装嗜好や流行、機能性、社会的規範を重視すること、(3) 服装や流行への関心が高い高齢者は、低い高齢者と比較して、町内活動やボランティア活動に積極的に参加していること、そして活動能力や生きがい感も高く、メンタルヘルスも良いこと、などが明らかにされた。

本研究は、横断的な調査研究であるため、それぞれの因果関係については慎重な解釈が必要である。今後は、縦断的研究や介入研究で、装いと QOL の因果関係を明らかにしていくことを課題としたい。尚、本研究は、文化女子大学文化ファッション研究機構「服飾文化共同研究拠点」からの研究助成を受けている。

## 文 献

- 箱井英寿、上野裕子、泉加代子、福岡欣治、田中優(2001)高齢者のファッションセラピーに関する基礎的研究。第7回健康文化研究助成論文集、75-82.
- 箱井英寿・上野裕子・小林恵子(2001) 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究(第1報)—着装時における高齢者の感情・行動意欲の変化にかかわる要因の検討—。繊維機械学会誌、42、752-759.
- 箱井英寿・上野裕子・小林恵子(2002) 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究(第2報)—高齢者ファッションショーが高齢者の被服意識・行動に及ぼす効果—。繊維機械学会誌、43、749-757.
- 小林茂雄(2000) 老人ホームにおける衣生活とおしゃれ行動。繊維機械学会誌、53、229-236.
- 近藤勉・鎌田次郎(2004) 高齢者の生きがい感に影響する性別と年代から見た要因。老年精神医学雑誌、15、1281-1290.
- 古谷野亘(1992) QOL の概念と測定。柴田博編、老人保健活動の展開。医学書院、東京。
- 古谷野亘、柴田博、中里克治、芳賀博、須山靖男(1987) 地域老人における活動能力指標の測定—老研式活動能力指標の開発—。日本公衆衛生誌、34、109-114.
- 西藤栄子、中川早苗(2004) 中高年女性のおしゃれ意識と規範意識。日本家政学会誌、55、743-751.
- 岡田宣子(2000) 高齢者の衣生活行動の現状と要望点—被服の調達と選択行動を中心として—。日本家政学会誌、51、595-603.
- 劉敬淑・全璟蘭(2005) 韓国10代の青少年の自尊心と身体満足度が生計や服装行動に及ぼす影響。日本家政学会誌、56、105-114.
- 柴田博(1996) 高齢者の Quality of Life (QOL)。日本公衆衛生雑誌、43、941-945.
- 田中優、秋山学、泉加代子、上野裕子、西川正之、吉川聡一(1998) 高齢者の自律と着装行動に関する研究。繊維機械学会誌、39、716-722.
- 上野裕子・箱井英寿・小林恵子(2002) 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究(第3報)—老人福祉施設におけるファッションショーが高齢者の情動活性に及ぼす影響<高齢者の感想文より>—。繊維機械学会誌、43、758-765.
- U.S. Department of Health and Human Services. (2000). Measuring healthy days, population assessment

of Health-related Quality of Life. Atlanta, Georgia.

山岸裕美子（2000）特別養護老人ホームにおける装いの工夫の働きかけ —自然感情を中心とした試み—, 繊維機械学会誌, 53, 237-243.

矢富直美（1994）日本老人における老人用うつスケール（GDS）短縮版の因子構造と項目特性の検討, 老年社会科学, 16, 29-36.

財団法人健康・体力づくり事業財団（2000）健康日本21：21世紀における国民健康づくり運動, 健康日本21企画検討会・健康日本21計画策定検討会報告書.